
ハリー・ポッターと異世界から来た少年

花鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターと異世界から来た少年

【Nコード】

N4824M

【作者名】

花鳥

【あらすじ】

ハリー・ポッターの世界にオリキャラという存在が入ったらどうなるか？

ふと思って書くかと思いましたが。基本原作通りに進めていこうと考えております。不定期更新になりますけどどんどん感想送ってください。

誹謗・中傷などはお断りします。

プロローグ

Side ???

あれ。ここは何処だ？

家じゃあねえな。

辺りを見ても何もない。ただ、白い。

「はあ、何でこんな所にいるんだ？てか、ここ、何処？」
一人漫才してると

「フオフオ。気がついたようじゃのう。」

どこからか現れた老人が俺の前にいた。

「あんたは？」「ワシは君達の言う神じゃのう。」

「はあ。神様ねえ。何でその神様が俺の前にいるんだ？」「すまなかった。うっかり殺してしもうた。」

と言いやがった。

「ふざけんな。」ドカバキバキグシャギヤー

少々、お待ちください。

「それで、俺はあんたのせいで死んで、生と死の狭間にいるんだな？」
「」

「はい。その通りです。」

めちやくちや腰低くなつたな神様。

「それで、お主を別世界で第二の人生を楽しんでくれ。」

これがよく二次創作である転生か。ん。てか、どこに転生するんだ。
疑問に思ったので神に聞くと、

「ハリポじゃ。」ヤッター、（＾o＾）／

マジでハリポの世界に行ける。なんてたつて、俺はハリポタの大ファン。原作の小説も全巻持つてるし、映画もまだ上映されてない死

の秘宝以外全部見たからな。

「お主の願いを3つ叶えてやる。」って神が言ってきた。

よし、それなら「一つ目は俺の顔をイケメンにしてくれ。二つ目は、モンハンのクシャルダオラを連れていく。3つ目はあっちの世界で普通に暮らせるだけの金をくれ。」「わかった。二つ目のクシャルはハリポの世界で合流してくれ。そーい。」
俺の隣にトランクが現れた。

「その中に、金とお主の私物を入れといたらから。それじゃ行ってこい。」

パカッと足下が開いて、

「ふざけんなあゝゝ」神に向かって言いながら落ちていった。

第一印象は大切です。（前書き）

ダンブルドア先生の口調が合ってるか不安です。

第一印象は大切です。

S i d e ???

「落ちてゆく。あの、ジジイ。今度、会ったら許さうね。てか、
どんだけ落ちてゆくんだ。あつ。光が見えた。」

光が急に光って目を瞑っていると、光が収まり目を開けるとそこは、
「部屋？」

そう彼は、何処かの部屋にいた。

「ここは何処だ？ハリポタの世界で合ってると思うが？」
彼がぶつくさ言っていると

「はて、さて。君は何処からわしの部屋に入ったのじゃ？」
後ろから、深く穏やかな声が、聴こえた。

S i d e ダンブルドア

わしは用事をすましてホグワーツに帰って来たんじゃが、誰かがわ
しの部屋におるのう。ミネルバやセブルスではないのう？「はて、
さて。君は何処からわしの部屋に入ったのじゃ？」と部屋の中にい
る人に声を掛けると、同時に部屋に入るとそこにはハリーと同年
くらいの少年がおったの。S i d e ???

まさか、まさか本物の「ええっとダンブルドアさんですか？」

「わしがダンブルドアじゃ。」ヤッタ、＼(＾o＾)ノご本人キタ
！。

「さて。何故、君が教えて貰おうかのう。」

あつ、やっぱり。さて、俺の事を話しますか。信じてくれるかな？
「...と言うことです。」

「異世界からのう。それで君は気がついたらわしの部屋にいたと。」
「はい。」

不味いぞ(・・・)信じてない気がする。何としても信じてもらわ
ねば、あつ。そういえば、神がトランクに俺の私物を入れたって言
ったから、アレがあるはずだ。アレとはそうハリポタの小説全巻。

入ってた（^。^；）

これを見て貰えば、信じてくれるはずだ。

「ダンブルドアさん。これを読んでください。」

読書中：

「わかった。君を信じよう。ここには、わししか知らない事が書かれておるからのう。」

「ありがとうございます。」

なんとか信じてくれた。

「君の名前を教えてくださいんかのう？」

「そういえば、名前を言ってなかった。」

「崎島 良夜です。」俺は名乗った。

「そうか。リョウヤか。ワシはホグワーツ校長アルバス・ダンブルドアじゃ。ダンブルドア先生と呼んでくれると嬉しいのう。」と手を出してくれた。

そして、俺とダンブルドア先生は握手をした。この後、俺自身が願った物に出会う事は知らずに。

おまけ

「リョウヤ。お主には一年生に入って貰うぞ。」

「えっ、俺、18歳なんですけど。」

「そうなのか、リョウヤ。しかしお主、どこからどう見ても11歳の少年にしか見えんぞ。」

「……………なんじゃこりゃ……………」

何か忘れてる気が、あつ。ギャー喰われる。

S i d e リヨウヤ

俺とダンブルドア先生が握手して、これからの事を話そうとしようとドドド…何か遠くから地響きが聴こえる。あつ、もうそこまで来てる。

バターン

「た、大変ですだ、ダンブルドア先生。い、急いで来てください。」
ハグリッド、キター。本物デケーなおい。

めちゃくちゃ焦ってるな。何かあつたんだろうか？

「どうしたんじゃ、ハグリッド？落ち着いて喋っておくれ。」
スーハ。スーハー。実は、

S i d e ハグリッド今日は、ラッキーな日だな。久しぶりに、ユニコーン達に会いに言ったら元気そうだったからな。

さつさと、家に帰ってフアングに餌やんねえとな。うん。なんだ、あの光は？うお。眩しい。む、光が収まってきたな。なつ。なんだ、このドラゴンは、俺が見てきたドラゴンの中で一番だぞ。こいつは佇んでいるだけに王者としての風格が肌で感じる。どつから来たか分からねえが、急いでダンブルドア先生に知らせねば。

S i d e リヨウヤ

うん。めちゃくちゃ冷汗が出てきた。絶対、俺が神に頼んだヤツだ。どうしよう？

「ふむ。ハグリッド、わしをそこまで案内してくれないかのう。」

「わかりました。あのダンブルドア先生。それとそこにいる少年は？」

ハグリッドがこっち見てきた。「おお。そうじゃった。リヨウヤ。自己紹介しなさい。」

ダンブルドア先生。絶対、俺の事忘れてたでしょ。ちらっと見ると、目を反らしやがった。

おい、マジで忘れたのかよ。泣くよ。さすがに今は心にグサツときたよ。

「えーと、初めまして。ホグワーツに入学する事になった崎島 良夜です。どうか宜しくお願いします。」

「俺は、ルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と領地を守る番人だ。宜しくなりヨウヤ。」俺とハグリッドは握手した。ハグリッドの手でかいな。

「それじゃ、行こうかのう。ハグリッド、リョウヤ。」

俺とハグリッドが握手してる最中にダンブルドア先生。部屋出ようとしなくてください。

移動中……

「やっと、つきました。禁断の森。」

「リョウヤよ。誰に言っておるのじゃ」

はっ、電波が来たような気が。「ダンブルドア先生。いました。例のドラゴンです。」

「ほう。あれが美しいドラゴンじゃのう。」

ダンブルドア先生が、言ったように本物のクシャルダオラだ。めっちゃくちゃカッコいい。

> 汝が我をここに呼んだか？<さすが、古龍。知能も凄く高い。

「ああ。俺がお前を呼んだ。俺の名前は良夜だ。お前の名は？」

自己紹介しながらクシャルに聞くと、

> ふむ。我らは人間共にクシャルダオラと呼ばれているが、名前はない。主よ。我に名前をつけてくれぬか？<

なんと俺が名前をつけてるのか。名前、何にしよう。確かクシャルは風は操るから、

「よし。お前の名前はストームだ。」> ふむ。ストームか。なかなか良い名前をつけてくれて、感謝する。我が主。<

「あのさ、ストーム。」

> 何だ、我が主。<

「その主つてのを辞めてくれ。背中がむずむずするからリョウヤと

呼んでくれ。」

> 良かった。これからはリヨウヤと呼ぼう。 < なんとか、主つてのを辞めてもらっただぜ。

あつ。こいつ何処に住まわせよう？それにワーロック法があるから困ったな。そうだ、ここはダンブルドア先生に聞こう。

「このドラゴンには、この森にいてもらおう。ハグリッドには世話をさせよう。それから生徒には見つからないようにリヨウヤよ。このドラゴンに言ってくれぬか？」

あつさり許可くれた。何故、そんなにあつさり許可くれたのか聞くと、ハグリッドがドラゴンを飼いたいって言ってたからという理由だ。

まあ、原作を知ってるからハグリッドがドラゴンLOVEって事は知ってるから、ハグリッドをちらっと見ると目からビームが出るくらい輝いてる。

さて、ストームに言わないとな、もう少しで学園生活始まるし楽しみだ。

何か忘れてる気が、あつ。ギャー喰われる。（後書き）

おまけ。

> リヨウヤ、この世界に来た時、私の事を忘れてなかったか？<
びくつ。

「ワスレテナンカイマセンヨ。ストームサン。」

> 片言で説得力がないぞ。リヨウヤ。許さんぞー（*、*、*）
<

「ギャ マジで喰われる。誰か助けてー。」

リヨウヤは一時間以上ストームに追いかけられた。

その間のダンブルドアとハグリッドは。

「平和じゃのう。ハグリッド、お茶を一杯いただこうかの。ブラン
ディたつぷりのをな」「はい。先生。行きましょう。それと先生。
リヨウヤはどうします？」

ちらっとリヨウヤを見ているとダンブルドアが「あのドラゴンとあ
そんでおるから良いじやろう。」

本当に誰でもから良いから助けて
待たんか、リヨウヤ。

いや

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4824m/>

ハリー・ポッターと異世界から来た少年

2010年10月11日05時45分発行